

令和6年度ひょうご躍動フォーラム 議事要旨

1 概 要

- (1) 日 時 : 令和7年3月 27 日 (木) 13:15～17:00
- (2) 場 所 : ラッセホール2階 ローズサローン(神戸市中央区中山手通 4-10-8)
- (3) 参加者 : 齋藤知事、令和5年度・令和6年度の躍動カフェ参加者 77 名
- (4) 内 容 : グループ別ワークショップ(A～Kグループ)
知事挨拶
意見発表・質疑応答、知事コメント(A～Kグループ)

2 意見発表の内容

A 兵庫で育てる（子育て環境の充実）

発表者：小笠原 舞（進行役）

現状と課題：

- 子どもや子育て家庭にとって温かい地域づくりにしていくためのキーワードは、「居場所」、「つながり」「不登校」。
- 居場所について、同じ悩みを抱える人と出会える場所や情報共有できる場所が日常にあまりない。
- つながりについて、一時的に子どもを預けられる場所があることのメリットを理解していない人が多い。人に頼ることに罪悪感があって、(遠慮してしまって)つながりづらい側面もあるのかもしれない。

不登校について、子どもにも色々な個性があり、不登校を認めることも大事だが、親としては仕事がしづらくなることで、金銭的に困窮することもある。また、不登校児について、親の立場で相談できるところが少ない。

課題解決に向けて：

- 居場所については、窓口として構えていても、実際には利用しづらい場合もあるので、日常でふらりと訪れることができるような、構え過ぎない、自然な形の居場所があるべき。そういった居場所をいかに作っていくか。

例えば、利用目的に応じて地域外の人も施設を使うことができるように、施設の利用対象を拡大したり、親がちょっとコーヒーを飲んでいる間、一時預かりをお願いできたりするなど、ハード面だけではなくソフト面の充実も重要。

- 子育て環境については、多自然地域と都市部とで事情が異なる部分もあるが、それを逆手に取って、色々と選択肢を増やしていくといい。

例えば、小学生の子どもが不登校になったときに、いざ居場所づくりをするとなると難しいので、幼少期の頃から、親子で多自然地域から都市部へ、多自然地域から都市部へ出掛けて、つながりを作っていくことができるといい。

- 総じて、自分の子どももそうでない子も、地域全体で見守っていける雰囲気はどう作っていけるかが大事。

意見：

- 全国的に小学校でPTAが解体されている流れがあると思いますが、これは、共働き家庭が増えたことにより、PTA活動に携わることが難しくなったことなども要因かもしれません。これに伴って、集団登校をしなくなっている地域も増加傾向にあります。

一概には言えませんが、集団登校がなくなったことも不登校児が増えている要因であると聞いたことがあります。自由登校になることで、親御さんと子どもだけの関係になり、学校に行かなくてもいい、という選択が増えることを危惧しています。

B 兵庫で育てる（世界で活躍する人材育成）

発表者：五十嵐 駿太（進行役）

現状と課題：

- 学術やスポーツ、芸術文化活動などの各分野で、若者が世界で活躍していくための基盤整備における課題として、1つ目にコストの問題がある。海外に行くにしても、海外から人を呼んでくるにしてもお金がかかる。
- 2つ目に、国際交流に関するネットワーク窓口が不足している。例えば、アーティストが自分自身の展示品をアメリカで提示したいと思っても、誰にどうアプローチすればいいかわからないことがある。
- 3つ目に語学の問題がある。学校で英語を勉強するときに、目的や将来像などをイメージしながら英語を勉強された方はほとんどいないと思うが、英語から一旦離れて、改めて勉強されている方はたくさんいると思う。

課題解決に向けて：

- コスト問題の解決策として、助成金などで海外渡航の支援があるが、例えば、海外でスポーツに携わりたいとか、アーティストとして活躍したいとか、それぞれやりたいことや夢が異なるので、最適化し、条件緩和して、必要なところに助成金を投じることができればいい。
- 国際交流に関する窓口不足について、県でそのような拠点を1つ設けてもらえるといい。例えば、スポーツで海外交流したい、海外校とつながりたい、自分の展示品をアメリカで出展したいといったときに、国際学習センターなど、ここにまず相談したらいいよという拠点が1つでもあると、迷わず相談できて、その先の自分でやりたいことにつながっていく。
- 語学を身に付けるために、「推し活のために学習する」というのも1つの方法。英語を学ぶために勉強するのではなく、やりたいことの延長線上で、自然と英語を身につくような学習方法を、教える側が提案していくことも重要。

質疑：

- 東京・大阪・福岡の3つの拠点で開催される旅好きの祭典「Backpack FESTA(バックパック フェスタ)」に、学生時代、よく参加していました。その中で、半年間ぐらいかけて夢を語り合いながら世界1周する企画があり、今回のBグループの課題解決に向けた提案がその形に近く感じました。

誰でも参加できて、海外渡航の支援制度を利用することができれば、若者達にとってもとてもいいと思いました。

応答：

- 私は子どもたちに向けて講演をすることがありますが、自分自身が旅をして感じたことや、海外でこんないい経験があったといったことを話したときに、心に響いたという中高生が多い、という印象があります。バックパックフェスはそういった機会づくりとしても、非常に面白いなと思います。

知事コメント：

- Aグループの不登校支援について。小さい時から居場所を作る大切さは、県や市町が行政としてどう関わっていけるかが課題。校内サポートルームやフリースクールの授業料支援を行うなどし、多様な居場所づくりを行っていく。PTAのあり方に関しては、教育委員会にも意見を聞いてみたい。
- Bグループの発表にあったように、若者の海外への挑戦は大切。県には国際交流協会があるので、海外ネットワークの窓口としてPRしていきたい。県の「海外武者修行プロジェクト」は、「個別最適な教育」という視点で行っている。自分で海外に飛び出していきたいという若い方は、調べる力やリテラシー力がそもそも高いと感ずるので、そういった意味でも個別最適なチャレンジ留学をこれからも支援していきたい。

C 兵庫で学ぶ（学ぶ機会の確保）

発表者：瀬名 香織（進行役）

現状と課題：

- リカレント教育(学び直し)は、多くの方が働きながら学びなおすということで、多くの時間を費やせないという課題が挙げられる。また、近くに学びたい分野やその教室がないといったアクセスの問題もある。さらに、学ぶ場所を運営する側としては、人員不足の課題が挙げられる。
- 不登校については、低年齢化が進んでおり、小学生の不登校児の居場所の確保が難しくなっている。

課題解決に向けて：

- リカレント教育においても不登校においても、それぞれに合った学び方の選択肢を増やすことが大切。
- リカレント教育を受けようとする社員を企業が応援する場合、企業にとっても何らかのメリットが必要となる。例えば、リカレント教育を推進する企業を行政が認定することで、企業としてはブランディングにつながり、そのような企業に就職したいという人も増えていくのではないかな。
- 子育てをしている親達のリカレント教育のハードルを下げるため、家事の代行サービスの費用補助があればいい。
- 不登校支援について、フリースクールが継続的に運営できるように金銭的な支援が必要。
- 不登校児の親は仕事を辞めざるをえなくなることが多く、比例して家庭の収入が下がり、最終的にはフリースクールに通えなくなってしまう。

- 県内でも学びの多様化学校(いわゆる不登校特例校)が設置されているが、まだまだ数が少ないので、さらに学びの多様化学校が増えることを期待する。

D 兵庫で学ぶ（地域との協働による学びの充実）

発表者：石井 靖敏（進行役）

現状と課題：

- 子どもと地域が連携し、子どもたちが社会活動に参画していくためには、学校と地域のつながりを情報の共有も含めてもっと良くしていく必要がある。
- 地域との連携がNPOやボランティア頼みになっていたり、属人的になっていたりしていないか。持続可能な取組が必要。

課題解決に向けて：

- 学校と地域とのつながりを生み出すためには、中間的存在が必要。例えば、学校と企業の連携をコーディネートする中間的存在により、学校の枠を飛び越えた体験活動や放課後学習の実施、また、企業と連携した活動も教育カリキュラムとして取り入れることができるのではないかな。
- 何より、子どもたちがどのように学び、どのように未来を作っていくかが大事であり、大人の都合でつながりにくいところもあると思うが、そこを取っ払って地域全体で教育をコーディネートしていけるといい。

質疑：

- 地域づくりにおいて、コーディネーターという存在は本当に大切だと思います。一方で、誰もがそれを担うことができるものでないと思います。どういった方に担っていただくことができるのかという点について、どのような議論がありましたか。

応答：

- コーディネーターについては、一定の基準を定めて選んでいくことになると思いますが、そのあたりは行政との連携が必要になるかと思います。応募から人選までは行政が担って、そこから選ばれたコーディネーターがどの学校や地域を担当するか、といった流れで分担できればいいのではないかと思います。

知事コメント：

- 不登校対策については、県としても、令和7年度からフリースクール等へ通う児童生徒への支援として、月1万円の授業料(補助対象経費上限、負担割合 県:市=1:1)の支援を行っていくが、フリースクールの支援は市町に担っていただく部分もあるので期待したい。
- リカレント教育は、その人にとっても、企業にとっても重要なこと。現役を退いた元気な高齢の方にとっても大事なことなので、県としてもしっかり取り組んでいきたい。
- 地域との協働については、部活動の地域移行が大きな課題である。プロスポーツクラブとの連携を進めるなどし、地域と学校、企業とで、しっかり取り組んでいきたい。

E 兵庫で働く（社会課題解決型スタートアップ育成）

発表者：細見 美香（進行役）

現状と課題：

- スタートアップ育成における課題の1つ目は、社会課題があっても、その課題を解決しようとするパワーがないこと。つまり、課題に向かって解決していこうと取り組むリーダーが地域にいない。
- 2つ目に、地域の課題について、そもそも課題に思っていない人がおり、地域全体での意識改革が必要。

この原因の1つとして、行政と民間の情報のミスマッチがある。行政が課題として認識していても、地域住民は課題として認識していない、もしくはその情報自体を把握していない場合もある。

- 3つ目に、多くのスタートアップビジネスが、都市部で完結してしまっており、地方への人の流れや波及効果が生み出されることが少ないのではないかと考える。

課題解決に向けて：

- 課題に向かって取り組んでいこうとする、強い気持ちを持ったリーダーを招致する必要がある。そして、そのリーダーに追随する仲間や組織、次の世代の育成も必要。
- 昔からその地域で生まれ育った人と、移住してきた人とのミスマッチは、コミュニケーション不足や情報の違いから起こっている。地域住民と移住者とが共通認識をもつことが大事なのではないか。
- ある地域では、公民館の改修に際して、ここにはクリーニング屋さんがないということで、募集して誘致したという事例もあるので、その町の機能を移住で補えるような仕組みづくりも必要。

質疑：

- ワークショップの議論の中で、「このルールがあるから厳しい」、「行政にもう一つ歩み寄ってもらえると次のステップに進める」といった意見があれば教えてください。

応答：

- 例えば、下水がない地域では個人で浄化槽設備を導入しないといけない場合がある。飲食店を始める場合であれば、個人宅よりも大規模な浄化槽が必要となる。こういった場合、丹波地域では補助事業があつたりするが、行政による支援があればなという経験があります。

F 兵庫で働く（魅力ある働きやすい職場づくりの推進）

発表者：垣崎 千晶（進行役）

現状と課題：

- 従業員の離職率を下げるがこのグループの共通の課題。
人材不足とよく言われるが、リクルートに力を入れるよりも、従業員に定着してもらうこと、今い

る従業員を大切にすることが大事。

- 従業員の定着率を上げるためには、経営者の思いや会社の理念を共有し、従業員のやりがいにつなげていくことが大事。地域と連携した事業を発信していくことで、地域活性化にもつなげていく必要がある。
- 従業員が希望する、やりたい仕事を選べるようにすることも大事

課題解決に向けて：

- 従業員の働くモチベーションを上げるために、経営者や幹部が、やりがいを持って働いている姿を見せなければならない。
どういった思いで会社を設立し、働いてもらっているのかということを従業員に理解してもらうことが大事。
- 従業員の希望や、それぞれの特性に合わせて仕事を割り振ることも大事。
- 会社が長く続くためには、次世代が活躍しなければならない。そのためにも新しいことに挑戦していく姿勢をとっていかなければならない。
- 県には、魅力ある会社を広く発信してもらうことを期待する。

知事コメント：

- Eグループのスタートアップ支援について、県では「HYOGO TECH イノベーションプロジェクト」を実施している。ファンドを作ることも大切だが、スモールビジネスや、地域の困りごとを解決するようなスタートアップも支援をしていきたいと思っている。
県内では丹波地域などで移住者が増えているが、住居不足の問題がある。空き家の活用対策として、家財道具や仏壇などの家財道具の片付けに要する費用などについて、県としてもサポートしていく。
- Fの魅力ある働き方について、県でも不妊治療の支援として交通費助成の補助等を実施しているが、経営者や管理職など、シニア世代の理解がまだまだ足りていないと思うので、大企業だけでなく中小企業にとっても、人材確保の視点でそういった支援は大事だということを広げていきたい。

G 兵庫で暮らす（地域づくりの担い手確保）

発表者：橋之爪 鮎子（進行役）

現状と課題：

- 行政としても、「担い手」の定義ができていないのではないか。地域活動の中でどういう課題があって、その課題に対してどのような理解が必要で、「担い手」が何をする必要があるのかということについて、我々も十分に分かっていない。
- 大学生などの若い担い手をいかに取り込んでいくか。一方で、若い担い手を受け入れられる体制が整っていないことも課題。

課題解決に向けて：

- 担い手確保に向けて、多様で細かな課題があるため、見取り図のようなものを作ってカテゴライズし、整理することが必要。そのためには、行政と地域との連携が欠かせない。
- 若い人を地域のまちづくり協議会などの役員として参画してもらうということもよいのではないかな。ただし、単なる職業体験や労働人材というような使われ方をしないように注意する必要がある。

H 兵庫で暮らす（地域住民の交流促進による暮らしの充実）

発表者：九鬼 麻衣（進行役）

現状と課題：

- 地域住民の交流促進というテーマの課題として、「つながりが弱い」、「地域間の交流不足」が挙げられる。
- 企業が地域ともっと関わりたいと思っても、機会を損失している場合がある。また、そのつなぎ役となってコーディネートする人材がいらないことも問題。さらには、コーディネートする人材を育てる機会も不足している。

課題解決に向けて：

- 本日のフォーラムのように、県内各地で活躍している人とつながり、情報交換することは非常に重要。その次のステップとして、行政、地域、企業をつなぐプラットフォームが必要になる。
- ただし、プラットフォームを作っただけで、機能しなかった例もあるので、コーディネートする人材を育てたり、適所に配置したりすることもあわせて必要となる。
コーディネーターの育成・配置の段階では行政に支援していただきたいが、地域としても、彼らが自走できるような仕組みを作っていかなければならない。
- コーディネーターを機能させるこの制度設計を、行政だけでなく、本当に求めている地域住民の方々と議論し、一緒に作り上げていければと思う。

質疑：

- 具体的にコーディネーターを集める方法や登録する方法について、アイデアは出ましたか。

応答：

- コーディネーターといっても、様々な分野や専門性があり、1人ですべてを担うことは難しいので、この分野の知識は足りていないけど、ここの分野は持っているね、というように、専門性を「見える化」していけるような仕組みがあればいいと考えます。

知事コメント：

- Gグループの地域づくりについて、地域の活性化にはリーダーの存在が大事で、多自然地域・都市部の共通課題である。県では「地域のネクストリーダー発掘プロジェクト」を進めていく。多様な方々が地域づくりに参画していただく中で、そういった方々同士の交流をどのように促進していくのかということも課題。
- Hグループの地域交流についても、移住などで多様な人々が地域に入ってくる場合の円滑な

受入れや、外国人移住者への対応、そういった方々の交流促進といったことも課題。

I 兵庫で暮らす（環境にやさしい農産物への理解促進）

発表者：西浦 有衣子（進行役）

現状と課題：

- 有機農産物を給食で提供することについて、生産者の所得向上がないことには進まない。
そもそも、給食は単価が低いことから、生産者の所得向上につながりにくい。一方で、まずは給食に取り入れられないことには、子どもや親に対する「環境にやさしい農業・農産物」への理解促進も進まない。
- 2つ目に、いかに消費者の有機農産物への理解促進を進めていくか。例えば、有機JASマークのついた農産物よりも、栽培期間無農薬の方が売れているという現状がある。
- 3つ目に、行政の縦割りについて。例えば、県から市町の農政部署に情報提供があった場合、そこからさらに、教育委員会やまちづくりの部署にまで情報が届かないといったことがある。

課題解決に向けて：

- ボランティアベースで、食育の機会の提供や、絵本作成による努力などが行われているという生産者の声もあった。生産者の所得が少しでも上がるよう、行政に価格差補填をお願いする。
- 有機JASマークがついた農産物をもっと消費者に手にしてもらうためには、環境保全型農業の食育も必要。また、都市と農村の交流の機会をもっと増やさなければならない。
- 役所内部で分野横断のコミュニケーションを深めていただき、消費者に情報が行き届くことを期待する。

質疑：

- 良い農産物を生産することと、ビジネスとして成立することとのギャップはありますか。

応答：

- 今でも、主流はいわゆる慣行栽培（農業や化学肥料を使用する従来型の栽培方法）ですが、化学肥料を減らした特別栽培、化学肥料ゼロの有機栽培、さらに、その他さまざまな規定をクリアして取ることができる有機JASマークといった段階があります。良いものを作ると値段が上がるが、そうなると買ってくれる人は少ない。

我々のような生産者は、食っていけないと成り立たないので、行政にはそのような価格差を理解していただき、発表にもあった価格差補填をお願いしたいです。

J 兵庫を活かす（訪日外国人誘客に向けた受入体制の構築）

発表者：山中 昌幸（進行役）

現状と課題：

- 訪日外国人の受入れ体制整備について、大きく3つの課題がある。1つ目はプロモーション不足。

- 2つ目は、滞在してもらうためのコンテンツ不足。例えば、姫路にはインバウンドが多いが、姫路城を観光して滞在はしない、といった例がある。
- 3つ目は、空港や駅から観光地へ移動するための手段がないという、二次交通の問題。

課題解決に向けて：

- プロモーション不足の解決策として、共同プロモーションを提案する。ただし、テーマを絞る必要がある。ここにいるメンバーで言えば、宍粟市は日本酒、宝塚は炭酸、三田はビール、淡路は国生みというように、「発祥の地」というテーマで絞ってプロモーションすることも面白いと考える。
- 滞在してもらうコンテンツとして、県のフィールドパビリオンもそうだが、地域のマニアックな、地元の人しか知らないけど面白い、といったものを発信していく。そのためには、マニアックなコンテンツを作り、プロガイドを育成していく必要がある。
- 二次交通について、神姫バスには「真結(ゆい)」という豪華バスがあるが、そういったバスを活用していく。一つのアイデアとして、「プロガイドによる豪華バスでめぐる発祥ツアー」を提案したい。

質疑：

- インバウンドが増えることにより、実際に地域にお金が落ちるのか。例えば、大手の会社だけが儲けることにならないか。インバウンドによって、地域が儲かる仕組みになっているのか、忌憚のないご意見をお聞かせください。

応答：

- 地域差もあるが、淡路を例にすると、北淡が人気で、洲本から南あわじにはあまり下りてきてくれないということがある。写真だけ撮ってお金を落とさず帰る、という観光客はあまり求められていない。理想は、複数日にまたがって滞在してもらうこと。オーバーツーリズムにならないようにするため、しっかりとガイドをつけて、ある程度長期間滞在してもらえるといいと思う。

K 兵庫を活かす（地域資源を活かした産品づくりの推進）

発表者：小川 陽平（進行役）

現状と課題：

- 「つながり」、「価値の創出」、「販売」の3つの課題を挙げた。
- 「つながり」については、農業という分野を越えて他業種の人と話す機会がないことから、これまでにないアイデアが生まれてこない。
- 「価値の創出」について、例えば、農家ではネギの上の部分を、生地屋では生地の手切れを捨てていたりするが、違う分野から違う角度で見ると、こういう風に活かすことがあるとか、別の価値があるといったことがある。
- 「販売」については、商品化して満足するのではなく、次の段階として、どうやって売っていくかという課題がある。

課題解決に向けて：

- 他業種とのつながりについて、短期的には、躍動カフェや今回のフォーラムはまさにその課題解決に向けた第一歩だと思う。違う分野同士が議論する場は重要。
中期的には、そのつながりを「見える化」していくことが大事。人材バンクのような受け皿ができれば、他業種とマッチングされることにより、新たなつながりが生まれ、新たなものを生んでいくことになると思う。
- 製品の価値をさらに高めるためには、商品開発の段階から、他業種の方に関わってもらうことが必要。情報発信については、インフルエンサーに頼んだりして、自分とは違う角度からの視点が大事。
- アンテナショップで単にものを売るだけではなく、つながりやストーリーを売っていければいい。

知事コメント：

- Iグループの有機農作物の取組について、生産者、消費者、流通の3点のポイントが大事。県としてもしっかり取り組んでいく。
- Jグループのインバウンドの受入れについては、観光は裾野の広い産業であり、例えば、地域の旅館やホテル、地域の農家などがつながっていけば、地域全体に経済効果が出てくると思う。オーバーツーリズムにならないようにしながら、付加価値の高いものを提供していただきたい。
- Kグループについて、淡路地域では、フィールドパビリオンのプレイヤー同士がつながり、商品開発を行ったりしている。多様なつながりを作ることはとても大事。